INTERVIEW with MICHIO TASE

コモンとしての場をいかに育むか。

田瀬理夫インタビュー

（ランドスケープデザイナー）

一九七〇年代からエコロジカルなランドスケープを手掛けるパイオニアであり、一貫して人の営みが自然と調和する風景をつくり続けてきたランドスケープデザイナー・田瀬理夫さん。これまで実践してきた環境の再生に注目し、住人、暮らし、地域と自然環境が共にあるような「場」のつくり方と育み方を若手ランドスケープデザイナーの三島由樹さんが聞く。

聞き手／三島由樹（フォルク）　文／佐藤千紗　撮影／高野ユリカ（特記除く）

自主プロジェクトとして始めた クイーンズメドウ

三島　20年という歳月をかけて育ててきた「クイーンズメドウ・カントリーハウス」（P.4）は田瀬さんにとっても特別なものだと思います。プロジェクトの経緯からお聞きできますか。

田瀬　発案した事業計画コンサルタント・アネックスの今井隆さんとは「クイーンズメドウ」以前から10年の付き合いがあって、環境と事業両面からのプランニングを一緒に手掛けてきました。でも、時代が早かったのか、ほとんどのプロジェクトでクライアントが途中で逃げちゃって。良い計画が絵に描いた餅に終わってしまい、やりきれない思いを抱えていました。ちょうどそのころ、アネックスで遠野に拠点となる実験住宅を建てようという計画が持ち上がった。土地を選ぶ段階になって、僕に相談があったので、「提案しても実現しないなら、自分たちができることをここでまずやってみない？」と持ちかけたんです。そこから、未来を描けるような方向を考えながらやってきました。

三島　馬と暮らす提案を通じて、どんな未来を描いたのでしょうか。

田瀬　日本一の馬産地であった遠野は数百年に渡り、南部曲り家、放牧地、駒形神社など、人と馬との関わりによって風景が形成されていたけれど、それが戦後一気に消えてしまった。でも馬と共に人が暮らす現代版馬付住宅を中心に、有機農業や宿泊事業を展開すれば、地域の再生につながると考えました。敷地には上下水道も通っていなくて、周囲からは「こんな所に住めるの？」といぶかしがられたけれど。2000年にパイロットハウス（現：本館）を建て、管理人として仲間が移住し、馬も飼い始めた。06年に新館ができたころから、ここを拠点にした地域の在り方を発信するようになって。研修を兼ねた宿泊事業や「遠野オフキャンパス」といって建築家の安宅研太郎さんを中心に東京の学生と遠野の高校生が民家調査や改修計画を学ぶ場も展開しています。

未来のことを考えれば、今のままではダメでしょう。自分たちがクライアントになって、その中で生業や空間が展開すれば、現状とは別の世界が可能になる。自分たちができる範囲でやって、若い人の刺激や現実を突破する勇気になればと思っているから、気負いはないのです。

造園から風景の再生へ

三島　田瀬さんの造園家としての考え方は、キャリアの中でどのようにつくられてきたのでしょうか。

〝コモン〟とは、日常性、地域性、社会性を持つもの

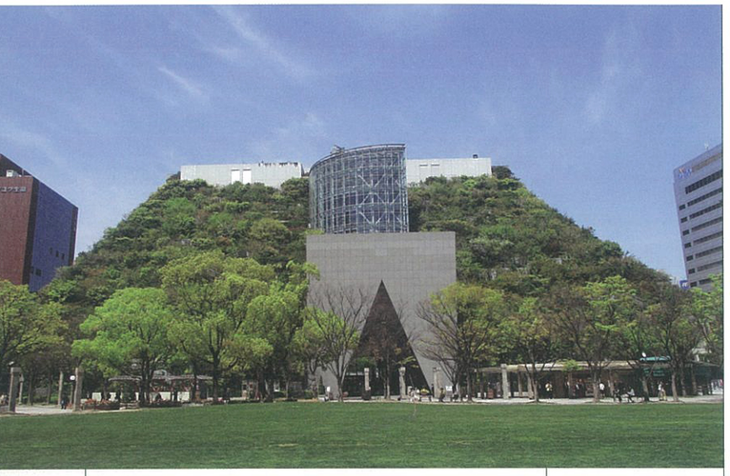
田瀬　最初から、みどりのデザインだけでなく、建築家と一緒に都市計画やまちづくりに携わりたいと考えていました。1977年に独立した当時は『都市住宅』という雑誌があったくらい、都市に住むことを実験していた時代。SUM建築研究所の井出共治さんと意気投合して、10年ほど集合住宅の仕事に専念していました。集まって住むことで環境の豊かさを共有する、本来あるべき集合住宅を目指して。でも、86年に竣工した「ゆりが丘ビレッジ」を最後に、それ以降はバブル経済もあって、マンションというのはいかに高密化するかという不動産の話へと変わっていった。それに限界を感じて、最初に話したように今井さんと共に「環境の再生」による地域の生業の創出をテーマにプロジェクトを計画したのですが、ほとんどアンビルド。

三島　「環境の再生」という本来ある姿を取り戻すランドスケープデザインを大切にしているのは、なぜでしょうか。

田瀬　それは原体験からです。64年の東京オリンピックの時、僕は中学3年生で、それを契機とした性急な都市開発をずっと見てきた。それまでの東京は水が澄んでいて、木もたくさんあるし、道路も石敷きで、周辺には田園があって、とてもきれいだった。そういう風景が子どものころの記憶として焼き付けられているから。

ゆりが丘ビレッジ（神奈川・川崎市）1986年

“斜面の魔術師”の異名を持つSUM建築研究所の井出共治さんと設計した82戸の集合住宅。各戸に数10㎡のルーフテラスを設け、窓からの眺めを想定しながら、一部屋ずつ植栽を計画。共用部には、周囲の雑木林に自生するコナラ、クヌギ、ヤマザクラなどを植えた。2011年にJIA25年賞を受賞。（写真提供／sum design）



アクロス福岡（福岡・福岡市）1995年

福岡の中心部にそびえる山のような建築のステップガーデンを手掛けた。複合施設に音楽ホールや国際会議場が入る。建築は日本設計、竹中工務店、エミリオ・アンバースが設計。「花鳥風月の山」をコンセプトに春夏秋冬で景色が変わる。竣工当時76種類だった植物が今では200種を数え、都心緑化の先駆けとして知られる。

目指しているのは造園家なしの風景。地域の生業が表れた景色になれば良い

今、「人新世」という人間がつくった人工物や行為が地球を覆い尽くす時代という概念が注目されているけれど、同じように僕は地域性と社会性のない開発や建築、営農などで覆われた「昭和・平成層」という地層があるとよく話してきました。

そうした現状認識がデザインの動機になっているから、自分のデザインをしたいという気はなくて、「せめてこれくらい戻ってほしい」という気持ち。目指しているのは“Landscape Without Landscape Architect”（＝造園家なしの風景）。元々の地域の生業が表れた景色になれば良いと思っているんです。

風景を再生する設計手法

三島　「造園家なしの風景」のようなランドスケープデザインは僕自身も追求しているテーマです。それを実現する田瀬さんの手法はどのようなものでしょうか。

田瀬　プロセスは地域の環境と共生する「デザイン・ウィズ・ネイチャー」*です。「エコロジカル・プランニング」も当然のことだと思っている。でもそれだけじゃ実現できないから、どうするかという時には、ルドフスキーの「建築家なしの建築」を参照します。その場で自然なことを選択する。建築は地域の材料で、外構も地域の在来植物や最寄りの採石場の石や砂利を使う。そうすれば、誰がやってもみどりがつながっていくでしょう。学生には「日常性、地域性、社会性の三つがそろうデザインを考えてください」という課題を出します。同時に三つがそろうというのは難しいけれど、どこであれ、それがあるとその場所らしくなる。それがコモンということではないかな。

三島　田瀬さんは気候変動が重要課題になる以前から在来種や生物多様性を重視していましたね。

田瀬　在来種というのは地域性です。日本の地形には細やかな襞（ひだ）がある。水系ごとに地域の文化や生業があって、尾根と谷を乗り越えることはあまりなかった。その地形に植生が被っているので、地域の在来種でランドスケープを構成すれば、最低限の地域性は担保できる。グローバルな視点で見ると、日本の細やかな地域性そのものが多様性でしょう。だから多彩な地域の植物によって、生き物の種類が増えることが大事。「これからどういう暮らしや生き方をするのか」ということに対するデザインをしたい。すると、どんなかたちにするかは自然に決まってくる。だから設計は何にも悩まない。地域の在来種リストから手に入るものを植えていくだけなのです。

徳島の神山町で植栽計画を手掛けた「大埜地（おのじ）の集合住宅」は子育て世代が集まって暮らす町営の賃貸住宅。在来種が手に入らないから、地元の高校生と山から採取した種をまいて、苗を育て植えた。20戸の住宅をつくるのに5年を掛けた長いスパンのプロジェクトだからできたことです。管理も外部に委託するのではなく、自分たちで手入れするガイドラインを渡しています。住人となれば長い間住むわけだから、管理を通して、社会性と地域性を同時に考える作業になる。それに、みんなでやると楽しいでしょう。労働ではなくて楽しみになる仕組みづくりも続いていく要件です。

味の素スタジアム
AGFフィールド みどりの広場
（東京・調布市）2012年

「武蔵野の森」をコンセプトに、緑化ユニットを用いた草土塁で芝スタンドを設計。建築は日本設計。隣接する「みどりの広場」では、武蔵野の原っぱ再生のため、プランタゴ主催のオフキャンパス・プログラムとして、年5回ほど選択除草が行われている。帰化植物を除草して、在来植物を残す。状況により、在来植物でも抜く。学生や社会人も参加し、現在までに在来種124種、外来種73種を確認するなど、多様な植生と生態系が育まれている。

広場の両サイドは既存樹のサクラや多彩な在来樹種を植栽。中央のマウンドはノシバと在来種草本による明るい芝草広場

植物の専門家、インストラクターの荒井浩司さんと園内を見て回り、在来種と外来種の状況を確認。当日除草する1、2種類を決める

剪定枝や刈った草はまとめてバイオネストをつくり、堆肥化する。これまで一度も場外にゴミを出していない（写真提供／富士植木）

創造的な草刈りが育むパブリックマインド

三島　「味の素スタジアム AGFフィールド みどりの広場」でも、市民が緑地を管理する市民参加型の手法を実践していますね。

田瀬　元々市民参加を前提にしていたわけではないのです。いつも提案に対して「実際誰がやるの？」という問題になる。でも「お金がないからやらない」となると何も生み出せない。まずやってみる。結果が出れば、予算がつく、人が集まる。周囲に展開して広がりを見せる。そういうやり方なんです。

「みどりの広場」では、武蔵野在来種中心の原っぱを育成する植栽管理のため、「選択除草」という創造的なスペック（仕様）を始めた。今年、隣の府中市が「選択除草」での管理の発注を始めました。そのうち東京都のスペックにもなるでしょう。8年続けたことで実績ができた。そうなると、造園会社の仕事も変わってくる。今の草刈りは、猛暑の中バリカンで刈る労働だけど、地域の質をつくるみどりの管理という技術なのです。クリエイティブになる仕事の発注の仕方が重要で、街の人に草刈りがリスペクトすべき仕事だと思われないと。状況に応じて、在来種だって刈るし、流動的に判断できる知識や技術が求められる。住人が草刈りに参加すれば、与えられた緑地を自分たちのものとして育てていける。そういう意味でも管理はパブリックマインドを育む社会性そのものですよね。

三島　最後に、田瀬さんが最近取り組んでいるテーマや、これからの展望があれば教えてください。

田瀬　去年から立命館大学でランドスケープデザインを指導していて、「地球温暖化と生物多様性の衰退」の中で「人と自然がつながる暮らし」をテーマにしています。今は人間だけじゃなくて、動物や植物を含めた地球的な視点が大切になっているでしょう。学生たちはスウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリに近い世代。彼女に応えるものを提案してほしい。デザインの個性を競うトレーニングではないので、人がやっているものは全部採り入れ、みんなで学び合い、集合知をつくっていく。

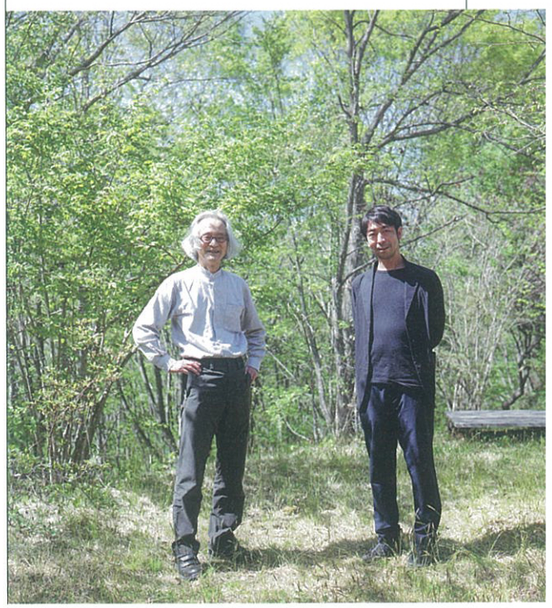
僕らが関わる前に、動物や人がいて、その延長で今どう振る舞うか。

クイーンズメドウでは、生きている間に咲かないかもと思いながら、桜の苗木を植えた。その間にいろいろなことを考えるし、その蓄積が振る舞いとなる。誰かの思想を持ち込むのではなく、ここにある土地と価値に関わること。僕らが関わる前に、動物や人がいて、その延長で今どう振る舞うか。長期的、広域的に環境を捉えるスコープです。やれるうちはやるんでしょう。また誰かが引き継ぐでしょうしね。

*アメリカのランドスケープ・アーキテクト、イアン・マクハーグによる1969年の著作。生態系の秩序にランドスケープデザインの規範を求め、エコロジカル・プランニングの手法を確立。

（INTERVIEWER'S NOTE）

田瀬さんと会うのは10年ぶりだった。今回のインタビュー中、「本来であれば」という言葉を田瀬さんは繰り返し語った。そこにあるべき固有性と普遍性について考え、それを成立させるための時間とエネルギーを惜しみなく確信を持って注ぎ込んでいく。田瀬さんが言うように、やることはシンプルであり、決して特別なことはない。デザインの対象は敷地やモノではなく社会や生き方であり、一人の人生を超越した時間軸である。その姿や仕事は、新しい／古いという概念とは無縁で、時を重ねるほどにみずみずしさを増す風景のようだ。時代の転換点である今、僕たちが取り組むプロジェクトは、今後10、20年と積み重ねていくことが前提となる仕事ばかりだ。そういう時代において、田瀬さんというデザイナーの在り方は、重要なレファレンスで在り続けるだろう。〈三島由樹〉



田瀬理夫
Michio Tase
1949年東京生まれ。73年千葉大学園芸学部造園学科卒業、73〜77年富士植木勤務。77年ワークショップ・プランタゴを設立。現在、プランタゴ代表。主な仕事に「アクロス福岡」「地球のたまご」「クイーンズメドウ・カントリーハウス」「現代町家」「大埜地の集合住宅」など

三島由樹
Yoshiki Mishima
1979年東京生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業。ハーバード大学大学院デザインスクール・ランドスケープアーキテクチャー学科修了。ニューヨークのランドスケープデザイン事務所勤務、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教を経て、2015年フォルクを設立